

バッタとの格闘

その名前は「サバクトビバッタ(砂漠飛蝗)」というらしい。忘れもしない一九八八年一月、雨季も終わりにさしかかったころ、セネガルで見えたあの大群は国際連合食糧農業機関(FAO)の記録にも残る大被害を西アフリカ一帯にもたらした。

度肝を抜かれる

わたしはバッタの大群のまさにど真ん中にいた。セネガルのファティック州のある村で調査をしていたこの年、ニュースでは隣国マリでのバッタの大発生を報道していた。田圃にイナゴが飛び交う程度の状況を想像していたわたしは、村に押し寄せてきたバッタの大群に度肝を抜かれた。インディ・ジョーンズ・シリーズの映画さながらの昆虫の襲来である。この種のバッタは成虫になってもしばらくは飛ぶことができない。大群になつて地面を這いながら、ひたすら一定方向に進んでゆく。まるで何かに取り憑かれていて一群のようだ。辺り一帯が緑と茶色のバッタの体色に染ま

り、地面が波打つようにうごめいて見える。バッタの身体や草がこすれてわずかにかさかさという音も聞こえる。進行方向に木や建物などの障害物があれば避けることなくまっすぐ上り、また地面にもどつて突き進む。食べられるものはすべて食い尽くしてゆく。木であれば一枚の葉も残らず、草ぶき屋根は丸裸になる。大群は我先に進もうとする統制のとれていない行進のようだ。互いの身体を乗り越えながら、交尾をしながら死骸を頬張る。道路では車に潰された死骸がどろどろになって、車はスリップした。

悪戦苦闘

日本にはイナゴを佃煮にして食べ

る習慣がある。もつともそういう知識は日本だけのものではない。タイではバッタの空揚げを自転車の荷台に積んで売り歩く人を見た。つい先日には、フランス人の農業研究者が大発表と称して、バッタの有効利用についてテレビで得意気に話していた。いまさらこんな話でもないだろうと思つたが、この研究者は大量のバッタを美味しく食する方法を自ら開発し、試しているらしい。フランス料理に登場するバッタはどんな味だろうか。

しかし、ムスリムの多い西アフリカの人びとは、コーランに則つて殺した動物しか食べない。豚や野生の小動物なども食べない。そうになると、バッタが料理される可能性は極めて

低いのではないだろうか。そうならば、この大量のタンパク質を肥料にでもすればよいのと思つたが、セネガルの人びとはまったくそういう関心がないようだった。バッタは数日をかけて村を通り過ぎていった。人びとは太鼓を叩いたり、焚き火をしたりして、バッタが屋敷のなかへ入ってくるのを妨害しようとして苦戦していた。もつと効果的な駆除方法はないものだろうかと思つたが、あの大群は人間の力で何とかできるようなものではなかったと今になってみると理解できる。

黄色に染まる空

バッタは雪だるま式に増えながら



さらに増殖しようとする生命力をあらわに進むバッタの一群

西へ向かつて移動を続け、とうとう沿岸地帯まで辿り着いた。大きな黄色の身体に成長したバッタは、アフリカ大陸の西端から大西洋を渡つて、カリブ海沿岸まで四〇〇〇キロメートルという旅をしたそうだ。海辺にある首都ダカールでは、空一帯がカナリアより大きなバッタの大群で黄色に染まり、ベランダのガラス窓にバッタがぶち当たり、部屋のなかにまで飛び込んでくるものもあった。ヒッチコックの『鳥』が現実になつたようだった。

それにしても方向を定めて進んでゆくのは不思議な本能である。餌を求めためか、繁殖のためか、天敵から逃れるためなのか、諸説がある。また、バッタは磁力を感じて移動するとか、風の流れを捉えるのだという説も耳にした。風に乗るといのはほんとうらしい。風速に近い速度で、一日に一〇〇〜二〇〇キロメートルを移動するという。

バッタの大発生は古来にも記録があるが、毎年というわけではない。ただしいったん大発生すると群れが次世代の群れを生むため連続して起こることが多い。気候条件がそろつて、ある程度以上の個体数が生まれると、その集団の密度が個体に変異を及ぼし、移動に適した個体に変化する。その数は、一平方キロメートルあたりに数千万匹が数えられると

いう。個体数が増えれば増えるほど、個体は群生行動をするようになり、その傾向はさらに強くなって次の世代に遺伝する。なにしろ数カ月で一〇世代以上にわたつて増加をもたらす繁殖能力をもっているのである。

残るは神頼み

日本でもイナゴやバッタの被害はめずらしいものではなかった。一九世紀末には北海道の開拓地での記録的な大発生がみられたほか、二〇世紀後半でも沖縄の大東諸島や鹿児島、馬毛島などで被害が生じた。二〇〇七年には関西空港でもトノサマバッタが大発生した。九世紀の古文獻(『古語拾遺』)には蝗害防止のために祭事を執りおこなったことが記されている。各地の神社には蝗害に対する祈禱をおこなった記録が残っているらしい。

神頼みは時代を越えていずこでも同じだったようだ。セネガルでも祈禱師が登場した。太鼓や火でバッタを追いかつたというのほとんど神頼みに近い。もちろん近年になつてやつと国際機関による薬剤散布がおこなわれるようになった。しかし、それで退治できるのはたかがしれている。干ばつが人間の手には負えない天災であるように、バッタの被害もまたそういうものなのだ。